

もそこには含まれていない。味気なさを感じているのは筆者だけであろうか。

第三章は、プロカ中枢の今日的意義について論じられている。最近はCT、MRI、PETなどにより、生存在に患者の脳の局在機能を画像で把握することが可能となった。プロカの時代には想像もできなかったことである。ところでプロカ中枢は左前頭葉にある。右前頭葉の同部は一体何をしているのであろうか。これは筆者の年来の疑問である。

最後のプロカの業績一覧は完備していて、幅広い専門家である彼の側面がうかがえる。デュシエンヌに先がけてデュシエンヌ型筋ジストロフィーの報告(一八五)をしているあまり知られていない論文もある。「肉眼で判らないことは顕微鏡で見てもなかなか判らない」など、本書は単にプロカの紹介だけでなく、著者の思想がにじみでていて面白い。

本書は前二書と同様、読む人それぞれに新しい問題点をみつけるヒントを与えてくれよう。

(古川 哲雄)

(東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三一―東大構内、電話
〇三―三八―一―八八一四、一九九二年五月刊、A五判、三〇
三頁、五一五〇円(税とも))

和田耕著作『安藤昌益と三浦梅園』

『安藤昌益と三浦梅園』という、江戸末期、ともにほぼ同じ

時代を生きた、独創的な哲学・思想家についての記述である。この両者の思想的内容は余りにも深奥なものがあり、充分書評となっているか危惧しているが筆者にとっても興味をもっている人物である。

本書の内容は、I、安藤昌益と現代、II、陶淵明と安藤昌益、III、三浦梅園の医学思想、IV、贋作の証明、V、思想史研究余話となっているが、書評としての性質上、主にI―IVを中心とした。

彼等が生きた時代は、これより先きに我が国の医学は『黄帝内経』を思想の中心にすえた後世方医学から、儒学の洗礼を受け、『傷寒論』をより処とした『古方医学』に変換していた頃である。著者は昌益は「気の医学」を通じて『黄帝内経』にその基をおいているという。彼の提唱した、一元気論は確かに『内経』的な側面を有しているが、古方医学に対するほどではないにしろ、「此の書をもって黄帝岐伯問答の医書となし、聖知を以て民の病苦を慈んで医法を始むと云ること偏りなり」(稿・自・四)、「三部九候」「三陰陽」「十二府臟経絡」など三言の制法を放妄の医論といひ(刊・自・序)、さらに運氣論など十千十二支によるものは「皆な十二言を以て運氣病論治す。故に皆な失れり」(統・人倫卷)ともいつていることを付加しておく。

彼の生涯は最近おぼろげながらその全貌をあらわして来ている。その主張の中心は土であり「直耕の人」―農民こそが至上のものであり、その理想社会は「万人が直耕する社会」

であった。このような自然哲学的古思惟が従来強調されてきていたが、近頃あいついで医人としての彼の業績にスポットが当てられてきた。彼の著、稿本『自然直営道』は百一卷九十三冊あったとされるが、現在ではその十五冊が残っているにすぎない。しかしその亡佚した題名を見ると彼の並々ならぬ医人としての輝きをみる事ができる。曰く『医者真者問答卷』『古医法妄失論』『薬性記』および『婦人門病論』などの各論的なタイトルがある。有名な龍野一雄氏は浅田宗伯『万函』のなかに、「安肝湯（安藤昌益伝）治小兒腹膨脹、青筋出、皮膚甲錯、或喜唾、右出候者、使君子以下九味」を見出している。宗伯が後世派の大家とすれば、昌益のよつてきた立場もわかる興味があるところである。また現存するものには『人相視表知裏卷』がある。なかに八気配当表ともいべき五行（ここでは木・火・金・水の四行）があり、さらに人相による望診的記述があり、臨床家としてのすこさもうかがえる。

三浦梅園は昌益よりおかれてこの世に生まれたが、両者は互に北と南によって独自の思考を展開していった。

『玄語』『贅語』『敢語』を彼の三語というが、『贅語』身生門では、人間を動物の一つとして位置づけ、生物（動・植物）の分類を試みているが、それを見ると難かしく、未完の域ででないようであるが、著者はこれは梅園の学者としての真摯な面を見るものだとの好意的な評価をしている。『玄語』の中の「保持奉逢図」には、精・氣・神のパターンが示されているから、少なくとも道教的な面にはふれていたであろう。

著者は梅園を昌益のような本草学者ではなく、貝原益軒のような博物学者でもないが、一人の哲学者として生物について細かい考察を重ねたという。その分類は全く独自であり、西洋的な分類とは遙かに異なっている。

さらに著者はIIの部で、江戸期養生思想の系統に言及し、益軒・香月牛山・昌益・梅園・白隠禪師について分析している。養生思想は自ら「一元氣論の医学」とかかわりをもつから内容・程度の差はあつても比較検討することは有意義である。益軒の『養生訓』は飲食・色欲・睡眠の三欲、肉食を慎むことを第一として、道教の養生術と一步を隔し、以後、養生思想の主流となつて行つたから、氣に偏したという道教的な養生術は必ずしも主流とはなりえなかつたとのべている。牛山（老人必用養草）は益軒以上に極めて医学的な養生術であり、臨床医家の立場をとつているとし、昌益は益軒の養生思想と牛山の医学的な養生論、および臨床医学を兼ねたものであり、梅園（養生訓）は、道教的な養生術とは異なり、益軒より、より論理的であると、さらに白隠（『夜船閑話』）は、これらの中で最も道教的養生思想を展開していったものだと著者はいつている。

養成思想は、病を未病に治すという見地からいえば、医学思想の根幹をなすものであり、現在起りつつある老人社会問題、福祉社会問題からも切りはなすことができな重要性をはらんでいるから、この検討・研究はなおさらに進展が期待される。いずれにしろ、本書は昌益と梅園という難解かつユ

ニークな二大思想家を医学的な観点からもその視野にとらえた点で、大きく評価できる。著者は昌益研究の有数の権威者であり、会員諸氏に一読をおすすめする次第である。

(吉元昭治)

(甲陽書房、東京都千代田区神保町二一〇、電話〇三三三二六
一―二二六〇、平成四年十月刊、四六判、三〇八頁、定価三八
六三円)

高崎斐子他編『明治天皇の侍医 池田謙齋』

一

日本医学史学における一つの目的は、学術それ自体の生成発展や影響関係を究明する事、それに関わる人物の日常生活や、思想と技術の確立に至る生涯、地域的展開を背景にした師弟関係を明らかにする事等であろう。幕末維新期の欧米諸国からの学術の導入と定着の観点から、この変革期を生きた医学関係者の自伝や評伝が意義深い所以である。

本書の意義は、謙齋のベルリン留学中の五年余(明治三年二月―同九年五月)の間、留守宅におきた長男誕生と実兄・義父・妻の死去とに揺れる書状内容や、謙齋がうけた文化衝撃とその文化変容、および、謙齋『回顧録』に見える医学修業期の姿、にあり、長与専齋、石黒忠憲等に比して、声高に語られなかった生涯の自覚を聞き取ることは評伝に関心をもつ者の喜びである。本書の構成の標題(筆者)を示せば、次の通

りである。

家譜・口絵(池田謙齋・入沢家・入沢家両親・謙齋家族・辞令)序文(大鳥蘭三郎・酒井シツ)、プロイセンよりの書簡(池田謙齋)、池田謙齋あて各氏書簡(石黒忠憲・岩倉具視・大山巖・加藤弘之・桂太郎・木戸孝九・品川弥二郎・杉孫七郎・高木兼寛・外山正一・中江篤介・長与専齋・長谷川泰・浜尾新・土方久元・福地源一郎・松本珪太郎・三宅秀・山泉有朋)、回顧録(池田謙齋)、謙齋池田先生墓碑銘(入沢達吉)、池田男爵招魂碑(吉原義雄)、父謙齋の思い出(高崎斐子)、筆のまにまに(高崎斐子)、久子物語(入沢達吉)、池田謙齋一(堀江健也)、池田謙齋伝補遺(長門谷洋治)、『明治天皇記』のなかの池田謙齋、跋文(池田允彦・安部恭子)、池田謙齋年譜。

二

謙齋生涯の概略は本書収録の堀江健也、長門谷洋治両氏の記事によって理解される。謙齋本人の『回顧録』は明治三四年、六一歳時の口述筆記に基づき、大正六年、喜寿の祝いで親戚に印刷頒布した(入沢達吉識語)が、十五年後の印刷に際し訂正もせず、回顧録特有の記憶違いの箇所も残っている。内容は前半生の医学修業時代に止り、医学教育、医療、侍医、軍医などの明治期の諸制度確立過程に関わる記述は少ない。本稿では人間的側面に焦点をあて、『回顧録』と「プロイセンよりの書簡」について紹介したい。

『回顧録』の発端の出自と修業過程では、尊皇攘夷というその時代特有の若者の思想と行動とが示されて興味深い。例え